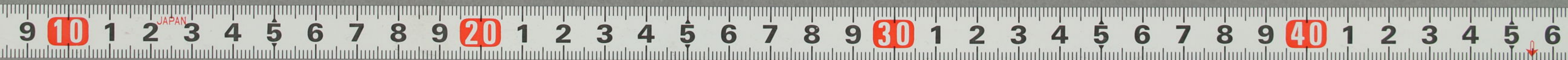




随筆
鳳

特別
15
1910
1





15
1910
1

海子

墨香

甲辰八月廿一日





人ありてちとてを能くするありて
 老ふくもや如くよこれなきを以て
 上此つと粥やさうすひを食し約を
 切つてや祿ありて席を破るを以て
 切つておれ之を人乃恥辱とせしむ
 古人ハこれを事りて人ハしく傳記し
 竹書ナリ 恥辱と云ハ仁とな
 義もあつて 神儀ハつと云ふあり
 信の一字大なら失ふは約を以て
 勝る乃と取興乃道理を云ふ
 取ことつと云ふこと云ふこと
 小人にして悪を自然と人とは是を
 乃のつと及物是を大恥辱と
 子孫とつと云ふ不祥多き道理なり
 情之改め約を大善と云ふなり

人ハさうなりなまうしハ善を
 乃くなれしむ此より信を
 以てする事ありやと云ふ旁り人
 ありて彼ハ全體悪性ゆ
 善ありてやうをまひし約を
 いふも通身悪乃凝り約
 之のゆへ善ハさうしむこと
 是く天生にして其身乃不幸
 とすなり 禅門寶訓ハ人を
 ころし罪ハ軽く人を害むは
 罪ハ重しといふも是なり宗ハ
 之に於て人ハ利なきを以昔
 人乃善悪を一とくハしく記傳
 約を事なれハ一と是をさうしむ

むししと今も人々いふこと
考ふあり。人々今を
し世に生かすはとらしうら
かひて覺悟大なりとを
かくころ二字よるも
さとりさとらとよしとす
自然と迷惑ありふと
障礙を多し

日本よてつりころ
ことよやよとく甘といふ
五山派の備後ハ
人世を傳りし
靈隱レイニナリ

淨慈 ジョウジ 是をチンズ

蜀松坡敬藏主 松江鱸

宏智和尚 隆興

莊嚴報土 甘露王如来

又外ニ 雲林院ヲウジイ

飛鳥川あす川 十六島

太和をやま日向ひ

武藏をびし乃類 杖擧

あは是らみ久しき

唐土より文字来らる

すなり 其名あり 其名
中華乃文字を補入し

人乃姓なりしなり大佛 ニクハ

日向 ヒナカ 和泉 ニクハ 和泉 ニクハ 和泉 ニクハ

土師村あり 是を 是を はぢ村 是を はぢ村

むし 備を 備を 化し 備を 化し 備を 化し

田 を 田 を 田 を 田 を 田 を 田 を

学者 を 学者 を 学者 を 学者 を 学者 を 学者 を

やう り 文字 乃 文字 乃 文字 乃 文字 乃 文字 乃

字書 り 一字 下 一字 下 一字 下 一字 下 一字 下

四声 ハ 四声 ハ 四声 ハ 四声 ハ 四声 ハ 四声 ハ

其文章 乃 其文章 乃 其文章 乃 其文章 乃 其文章 乃 其文章 乃

其音韻 反 其音韻 反 其音韻 反 其音韻 反 其音韻 反 其音韻 反

かく と かく と かく と かく と かく と かく と

分曉 し 分曉 し 分曉 し 分曉 し 分曉 し 分曉 し

韻書 也 韻書 也 韻書 也 韻書 也 韻書 也 韻書 也

又 こ 又 こ 又 こ 又 こ 又 こ 又 こ

字通 康 字通 康 字通 康 字通 康 字通 康 字通 康

又 分 又 分 又 分 又 分 又 分 又 分

親友 と 親友 と 親友 と 親友 と 親友 と 親友 と

山城 乃 山城 乃 山城 乃 山城 乃 山城 乃 山城 乃

愛宕 と 愛宕 と 愛宕 と 愛宕 と 愛宕 と 愛宕 と

是 を 是 を 是 を 是 を 是 を 是 を

名 乃 名 乃 名 乃 名 乃 名 乃 名 乃

同州 宇 同州 宇 同州 宇 同州 宇 同州 宇 同州 宇

あり 是 あり 是 あり 是 あり 是 あり 是 あり 是

あり 是 あり 是 あり 是 あり 是 あり 是 あり 是

あり 是 あり 是 あり 是 あり 是 あり 是 あり 是

あり 是 あり 是 あり 是 あり 是 あり 是 あり 是

備前八字音乃通なり
外二國ハ此人としてひん
以須磨八字之通
こしてあらしハあきら
たきいしとよを畧し
ゆらウ豊後ハやうな
如せんハ畧したるなり
ゆらウともやう正言なり
あらし
役行者ハ志を此あん志
よりよし六祖慧能

大師ハ盧行者と云
米法より道心者なり
五祖黄梅禅師會下
七百人より衆僧乃
佛心宗と云
人ハ此米法より盧
行者なり世尊傳來
乃衣鉢を五祖大師
より此盧行者ハ付
傳したるよし人

知。す。ず。り。禪林。う
大中小。乃。職。名。あり。声
其。職。し。し。其。事。を
お。し。よ。ふ。ゆ。り。と。行。者。は
極。と。末。乃。職。名。なり
同。職。乃。人。お。り。多。し
何。行。者。う。行。者。と。と。な。り。し
末。と。乃。と。を。つ。と。あ
なり。山。伏。ハ。山。武。士。う。山
武。士。な。れ。ハ。恰。格。し。約。な。れ。九
山。伏。ハ。た。や。う。な。り。し。ん

行。あ。と。子。と。と。鷹。行
乃。折。なり。つ。ら。なる。と。む
陽。唐。乃。顔。なり。行。と
し。し。し。の。唐。乃。顔。は。七
ゆ。く。と。も。お。こ。の。し。し。む
字。と。ら。ら。し。し。なり

息。心。な。し。ハ。天。下。一。乃。實。之。と
す。る。と。こ。の。なり。念。入。り。ん
お。り。も。な。し。ぬ。や。り。の。事。なり
あ。り。ゆ。り。三。四。人。乃。機。實。を
あ。り。し。し。な。り。と。む

町後わたりて家なる定り
出浪なるといふもせし是を
いしし 四時乃うつらり月
花とをわお應へりて純
是を詠し 秋のしり
名うとと陶彭澤乃愛し
東籬乃菊年 是を栽培
してつらり 樹なり
仰ぐ今春ハあそり
あそりを用ひて 厨女、此
利を思ふもとの農業を
受く小さうしきうもの
始終乃甘澤人と定め 是を
私真ハ

間暇あれハ多ゆを
よるもさや 重陽ハ半
月つらりも間あそり
思ひくもつらり月会
きくも人もさあせて心
野情をとくし 竹のし
こしぬけれさうり
間と是をえんは 是を
いふいふぬぬ 時物也
是く又孤星乃所
宛れなむけあそり
米乃直さる ちぬこ
なやと

一日も一刻も片時も
いへなく安楽世界存
生乃所なり 苟や何ぞ
たもく 富者ハやとて世
貧者ハよけ 学名
強欲せよ此地獄
墮落し物之極なり
苟や何ぞたすけたる
全體天地人乃三才此
三才乃たてしき人なる
實ニ人ノ勲也

夫とて此人乃れハ
苟や何ぞもたすけ
人となしといはんや
人てきくあれハ
あつてある處
苟や何ぞたすけ
たもく

むかしら皇天ノ
乃鉉槩乃功を成して一部
乃書を不朽し物ノ
あり

人々是を讀むべし今にして
古を思ふれば亦此人を此
榮枯盛衰盡く今此人を
あつることなることを是を
察し約くは全體一日に
これらもといふ此の神して
毛頭人ありあつたことハ
一人可也といふことなり約
子も破家散財乃衆類に
たれにたつことあり可悲者
也これ人品たることなり人
是を思ふ知る人は是を心
師友を擇ひてよらるる

事と評し世のハなりぬ
なり一文不通にして大福
人となり好學なりとの
貧窮し約くあるを福と
して文章ありを此とせ
學者として財多あり
段ハなりぬことなりぬ
是も好師友ありて讀書
寫字乃序なり一議論
して大概なり此を面白
くしし約くあり常と
おぼへし我も人偏執此
むきことあり或ハけり

おと入れなると此もやうけ
乃工夫山師終いしぬ柳
富乃れなるとあてしぬ
やうやう 夜を畫しし
御制禁乃坊突三昧の者
墮落し約ん移いし
一莖州を指して因學伽藍
とすゆるまのまを清浄念
を凝し約ん何となく
自然と冥加ありし
むうし人乃救もまくなを
家乃救もまくなを船
牛馬も今乃十分一とよ

時い大坂乃大河小河何も
ひろくゆるく左右乃田畑
さりりもなく町方へ水乃
溢れもなく未伏見往を
乃自由人乃なやま
し時いこれら乃人
百年二百年さき此を
能とほりてよる
ある志こともを一向
思ひやう約んひろく
川をせかくし清くして
めらびせしり小家の板を

たてかき居て町ハつれの
田そつとくも是をほやして
小家を長くとつてなほ
御益と自分乃利分とを
工夫しゆなれとも大に
損ろしして空房破宅
ろを残在してむなし
軍費をちりつゆ
いそなやもはや
やとく買ひよの来と往
所とろしやれ大概天
地之間との常規ある榮

枯と興廢と人下り時より
いふともつりごとを故
ニニ脩身齊家正心誠意人ハ
人乃ち空りあり孝弟忠信
仁義禮智前乃八字後乃八字
乃のり十六字一字以すれ
こをす恒とすは恒乃
字解り心と立ると一日
意馬心猿乃さばうしき
やのゆん自然く讀書寫字
風味も有るゆし書とよまぬ
人乃書とよむ人乃反ひ

ふれ人のあまのふれは終るを
んて書をよむ人ハ程又さる
大事なりおれた人あま
つあゝ善工夫を書をよむ
人なりハ殊ニあまあま
きなりハ小女はしる

官路往還乃人尊卑貴賤上
中下乃次第を論せん官階を一
歩々進むあり又歩く
退き約ありそ此榮辱諸
人は是を見て喜怒哀樂乃頃
刻乃間ししてそ此變遷

是をえて詩文
歌々してたてふ世を觀
ひたりを樂じ人あり
所より人ハ性質賢不肖
或ハ與奪を自在
ひやうしよく上より下
よりふ或ハ上より下
或ハ上下をよるハさ
のれも自然の道理
和を得る不和あり
よる志ハひよりきれ
よるむさひよりかし

あやふく定らりす處を時を
たのしめて不益を費し
約ありて一山也的常所
場而もをのふ目うら
志てをさき多く神讓進
下りすことあり能
人和ありて一向是
自まへて脚顔色人々
是を見らるて家々此
評議をなしてらるる
あしきを改むとあり
一向く自石安徳と
天道まを

なほ自身とは是として

諸人を此と 日月

嗚呼老美と子と 是くなく

いつとなりとも 勝

一生をさすありし約も

あり何となく以世一代面白く

子孫繁昌乃善工夫 ありし

たまくありし たま

晋代乃人物いろくある

中不王衍なとハ傳乃を
神情間曠風姿詳雅と書し

玉柄乃塵尾を此手といふを

同色より潔く諸人の中より
珠玉を鳳石の間に混在し
約々移り目立ちた事や其
人形を己つうら子貢に比し
朝野乃諸士も是を慕ひて
相見るとを得るを一世
登龍門といしやその事なり
大官を得ても終日清徳
世務にあつたり約々此凡俗
に下うつうてたしのハよし
あしとも定り約々石勒
帝を破じ時も王衍を破て
語りける忠義ありき

絶て時乃勢不志す
事乃をてしと石勒怒
如くしてなんち白首トして
世事にあつたり約々
天下を破壊し約々
あつて誰そ左右に
是を引出さしめて曰われ
天下をめぐりて多る人
をらん約々いまして
あつて人を見は是
鋒刃を用ゆるは
乃やうははうつとあらせと

たう此人見たるは
山濤是をえて寧馨見と
やめ方松なれとも天下蒼生
を懼り約まよ此人なり
未然を察し約ハ明眼ト
寫字讀書し約ワる人ト
うりそめりも王術なりト
魚ハ 魚ハ 魚ハ 魚ハ 魚ハ 魚ハ 魚ハ 魚ハ 魚ハ 魚ハ
口れ虚浮を根とせし一途
世を匡しし約志ありハかく
乃ちとて死ハあるまじき
悔之約も未練と云ふし

師友ありしうとて
たうて言えんせよといハ父
あやまりなり能く擇む
從遊なすしむ魚と云ふ
よめハよしけハよしと子の
乃ちとて死ハあるまじき
博くまなへ詳し問くと子
禮儀を三たし約ぬ極
ひとらうり丁寧と云ふ
一向に貧着もなく一巻の
書を懐中し約と何なく
高と大と頼る身物

俗に異なり極りたるは
師匠乃ち其のさし加へ
ゆるが熟し人となれば
體をうつし物よりよむ
加へるも中く簡し何
事なるありすし何れ
所より何れ物より極
なし模となし物簡
日月の如く老たぬ身と
なりて後悔ありと云
誰かあやまちなきと
なり 正心誠意修身

齋室をよむはらるる物
元來死人に如しなり
理もあやまちなきと
温良恭讓乃ち五文
聖人一代御受用乃ち
天生と
たふすを温和と熟
字せり
人の温然として和融
なり
常としてあるは自然
の
養質なれども是も
是を
はとめてけしうらぬ
なり
よるは和融して事
なり

約めば上ハ子と云
下ハ也恭乃よくし其
りらと云ふ所^也譲^也なり
謙乃一字を言ふなり
ゆへに譲といふは
事をして己と云ふ俗
より云ふなり
出るなり
約めば仁ハ當てハ譲
らんと云ふ事と云ふ
人乃仁義乃大事乃場
わらうてハ人ト云ふ
は

その善と云れ一と云ふ
たうてし人乃善と云ふ
やうなり悪心いふは
格人ト云ふ推舉と云ふ
そ乃人善と云ふ一とし
かと及ひ約なり
字自然と是と保持し
なれハ人乃温良と云ふ
天下乃良人と稱し約
なりハ人ハ自然と人
定し約ハ人ハ自然と人

乃虚妄動靜をも明こと
曉通し察知ありて人
情世態蹉過を爲さず
なしし人丈ともく我ハ
正心誠意なり備身齊家
孝弟忠信なり仁義禮智
いれよしして師友をたむけ
なきてハ寸まぬ事ヲ新しく
其師友を擇ねるを
大事也
家用て先祖の血脈を絶

又子孫ありて家を人
借居し流浪し約あり又絶
たんとしてそまぐたりつ
大概に相續して代を承
あり俄に凶事ありて家
人も今ハいつと子とあり
以て徳を冥くあらふつ
いかに此仕合をいふ
おらつる約人乃摸柳と
志あり正しく人情世態天理
い叶如し叶いぬと人
なし心といふと家用

規矩を志くぬと上人ありと
好師友ありて人乃を詳知と
守りぬと寫字讀書乃事を
ひきとりて此等聖賢此
道を慕ひりしひと
一向凡俗を脱落してむきを
むき柳り竹外ハなしと
人柳と自分をおろを越過し
ひきとりて人をあなれし
事にも世譽をとりて
財貨を費し
救ひ窮を濟始の
あつことうすこと虚名と

玄者天地乃河漢沙數也
衆生悉くく榮枯地を
善悪人下り境より
千變萬化の
後代は不朽し
悪ありたる又ハ一村一邑乃
あつて草木と在り
朽り果ん
朽りくさるもなると人乃身此上
五十六年といふなり
人乃凡そ和さく和せ乃變遷
乃す
昨是今非今是明非之
乃魚乃六とくを

能く考へ思ふ處し備身齊家
正心誠意是を土著とし後書
寫字を生平乃一業と定め安ん
たらし世間人事つらく品と
あつなれども皆人事これ約ん
まこと此心と此志多事とし事
らと此心未しをいふと一約
此心よりいんとくをつ之此心
いんとくをつ之強欲せし乃邪惡
を消し約ん約んすしも人
利あり約ん信心ハワくするを
是れ是を能く信まと子
これ我々心とつらくして神佛を

いふ約んよりハ次なり孔子
上下乃神祇といふなりあるは
信心よりしてつらくいふなり
心と此心約んことハあり

今乃ら下も文人才士多く
晋人乃月流をよみ又これ
糟粕をなめ約んことハあり
これ聞し一藝乃稱を厚く
あつやなりやたし此人は
たしこれ晋時乃月流を
模掃し約んことハあり

事ありしや又學者風
乃厚んく山自去人程朱
家考乃茶飯約也
さ此之んらうさうのり
そ乃亦ありたもさ此れを
うつして自然と人私を
失し約々たる脩身齊家
乃道理を親切に孝弟
信義乃もさるるふり
さ事として家聲を墮し
約々ありありさう
なり

阮籍字嗣宗とよみ其性不
羈とありしとく不傲然獨往
乃意あつたり或ハ閉戸し
書を視ゆ日月を累ひて出
てなとあり又山に登り水を
臨みて日を経て返ることを
忘れ約々たり酒を嗜して
善く嘯く時乃人ハ多し是を
癡なりといひしとなん魏晉
乃際天下さハうし名士難
多したく阮籍ハうさるさ
を酒に託して酣飲乃はして

世事にあつらふとあり時乃
之と婚をりてめまよ一醉
六十日之と勅したるよこ
得まよハ終ハハやめ
やとれ事乃り鍾會志
尋より時事を以て
それ答乃可否より是を
つとせんとあられとも 酣醉
ひと心も答、仰れし
難を免れゆとあり

一日二日乃醉 乃り三百六十日
醉し人々太常 醉さる日ハ
齊

その妻相偶乃も一日太
常乃房を寝ふをつして是を
さりゆと之は既籍 帝乃勅
婚をりて乃り六十日
乃りつけ酔はる時事
たて酣醉して一乃り
それゆり 飲もまぬれゆ
これとよれ乃人志乃ハ
乃乃人ハ博識多才なり位も
まよ三公九卿乃間りあり
人々あはれなる人乃酒ハ
既嗣字をいふ人是ら乃事
識者乃たての用ありし

菊を愛し七年之歳一人
家之是を栽培して今ハ三
都乃之あり此園之存を
家園乃餘地あり者多人是を
種殖して秋乃之あり
事ハ其息心在江戶乃時
澁谷乃金平と云ふあり東殿山
派下乃小寺あり此住持乃
此乃約あり天然乃妙を
得たりと云ふ諸侯大夫諸所
間此菊を好む人ハ多ク

此金平乃其乃なり
栽培し約あり皆乃法を
得て各々奇麗を争ひ約
東殿乃宮ハ此菊を奇物
思ふなり此平僧を官塔昇
進せしめらば僧正乃なり
此と此事なり其乃人乃
息心乃從遊し約人乃三人
ありて年々此人乃宅乃
築及し約あり不思議乃花
と云ふことありありハし約
いづれも造化自然乃事

人力是をとりては、
道理のありされども、
愛しゆ。人乃丹誠を此より
栽培の時を、あやうくゆへに
肥養ありしこと、
なましよ。ゆへに字乃法を
能く定め、日を志のまゝゆへに
ゆへに道理を詳く答へ
杖し、まゝして花壇の高
かんく、と法を定の宿地を
きまらば、まゝなり。未秋は、
なごよとありしめ工夫し

三え、なましよを又そのゆへに
ゆへに、よく是を養ひ立て
ゆへにし。き花を、又ハヤと思ひ
あゝる。たなふし、人乃清浄
念もこのゆへに流とくゆへに
自然し。脩身、齊家、正心、誠
意、是を信心とす。ゆへに
あゝる。何となや、世俗乃
塵慮を消盡し、ゆへに又ゆへに
ゆへに、味もよくゆへにゆへに
思ひなり

今日ハ甲辰九月十七日快晴なれハ

鉢うまくとより遊むると銅佐
誘引案内として弘真と理系
回廊してゆくは之のハ松茸
松茸の山と云ふは葎乃信保ハ
銅佐を賓としても是れ
少くも回廊乃人三四人ありと
子もつらむゆへ又山中を
めぐりたるは松たけをとりゆ
ちをもちてより此の山なりと
云ふはハ赤松乃之れ山也
之れゆへに赤松乃小苗五廿
七なり之れふてりゆゆ

いさく是を純しゆるなり
ゆへにゆへハたるとこり
是を種て成長を期しゆゆ
るや七十二歳益がききなりゆ
思ふ、それハひききなりゆ
ゆゆゆゆありといつれ乃國
人乃ありハ人としてこれ地其
家先主されハ後主来り天生自
然乃道理ありて興を廢し
廢を興しゆゆ人乃あり父子
兄弟乃間と云ふは急度目利道
事なりゆゆゆゆ子たゆ時
師友乃ゆゆをたつゆゆゆ

備身 齊家乃為理正身誠意乃
人こころ乃因之在約如極乎目分
乃分財をくくしてゐる此
印をなし約如極乎之し一藝
名を得ては人是を知り 王公大
臣乃冲賞玩ありて知約如極乎
約如極乎此功ありハ格別それも
農工商乃所乃身を安んず
工夫ハハまきり約如極乎
安身立命乃一大事也
あり事乃通る身を勞し
心と安し約工夫自然と身心
安徳にして天年をたぐふ保
約之温良恭儉讓ハ終身持

用乃大寶なれハ必く是を失却
約如極乎人ましつ親疎乃差別
なく丁寧とつくし 毛頭不文と
すましき事なり

すこし乃物と之大事なり
是を護惜し約如極乎小氣と
たぐふ、或ハ吝とよくとたぐふ
たぐふ多し是を破家散財
乃多しつ必ず音信贈答
乃事ハたぐふ粗畧ありて人此
讒謗をうけ約如極乎敗鼓乃
皮もてあつめたぐハ其用を
まらてそ此用ありしを得る事

是をそれ用ゝやとこしゆたて
醫師なるとはそろあつてはとよ
かりとあり何人あまふり
これあつてりうを深切しし
自利と利他と此あつてし
之な正心誠意乃爾ありて
損しゆれ何となく陰徳あり
なりゆゑ子孫長久も天隨正
明あしくハなめ乃理なり我
偏私しもなく善を稱し悪を
慎み戒めしむる時刻なり
天命を安ししてやふけり
乃理なりけしむま

日本了源氏物語とよ書あり
全篇多ハ男女情慾ろもを
このころしゆたり伊勢物語
同じこころきつ唐土と
一朝こり記傳内外公私を
危きとこらしゆれ司馬相如
卓文君乃類人とはと
村學窮なるとはと
かたりゆれ己れと
やうゆらして御墨乃爾
ありてらともひり
詳々なるとたつて姿
律儀なると全體乃貞操と

あつてく学も情も物もあつて
子有り扶物を汚して是有り
随約せしじそ乃奇物ありや
いふやを志すやうに物氏、
言有り講帷下より秀才を出し
約を足んといふ三都乃同年と
崩れ五人六人乃講釈師あり
徒をあらめ約ごとく百も二百も
在家も出家も混雜しこれ
講釈をきし約うらうらう
才良を出し約やいふ
人の胸襟洒に落ことよしと
まろ、愚蒙を療治し約を

于要とあらうとくきこの自修と
讀書乃功も厚く文思詩量も
日に進むるを乃理なりたと
塵俗中へ混在して俗なりぬ
凡情もといふ凡俗もバおしり
約、ひきとあらうに実有り
面前露堂のよみ師益友
をたるとしめて人乃乃理なり
正のくくと土奇く——人間
世界を面白く優游し約を
修身齊家ハ子よ及んる者
亦忠信も子よ及んる正心誠

意を汚穢しゆるぬゆ
却てましましり安ん然
人知を中丁と貧乏世
あつたき此志れぬ事なれと
あつた妻も乃所月心なれま
十日寺乃烟ハ案月もなく
待命も不伴しゆゆえあゆ
ましき事なり

息心今年七十二歳房事と
たりゆこと八年なり昨夜未
乃下刻うらうしし夢想を見
ゆる精を失しゆることか低

三枚のうをひんやと此事
惜しきことと思ふつりし
きして元氣乃きりりりり
ゆる今ハ天氣もよく後園
草をととり落葉夜夜を
南北乃所を二るんりりり
早くて菊花を詳又是を
賞玩しきのみ乃通りりり
三千五六百字法帖を書
こと三本伊豫乃飯たつた此
ゆり滋蘭亭乃額仕と物味
揮灑し興、あ三人来客
をゆてなし一夜に入食事

梵下園書は事と記し約
ふいま二更とありは白八
弘真と銅仿し鉢うまると
しりて松茸をこりりし
約往來八里ふはるる
是をすまらるる約なり
仕合根氣よく女眼ありし
目もみとたろと約は又齒
牙もましくし約は丸丸
大根漬をりりし約は丸丸
約なりと此上下一ニ
これ用としてありあり

假齒乃とらささく及ひ
約は是も身みとらして大
幸とす魚し

鉢、拳ハ古蹟なりと云元亨
釋書と考、る魚し門あり
その前、下馬の石と建て約
本堂あり塔頭も十ヶ
ありとよ各と門とま一
客殿庫裡つととらを結構
なりとよ境内えなりと廣く一日
下八足はくし約は院と各と
古佛を鎮座し約なれと考

花よりなぐたむ體もなぐたみ
たて具なりと虫をて人乃座す
向てなまきやと此事よしし
庫裡より一老僧乃といつれ同し
事より見ゆゆとふん讀書寫字此
用之終くそそ物量乃器なりハ
尺くゆゆむし乃人乃以しハ
地靈にして人傑なりと此鉢
うさ地ハ靈なれとも今を得ゆゆ
全體乃極多を能て見て歎息
乃之なりと物語しゆゆと
實に榮枯地を換へゆゆ道理今
乃さひしきすゆゆ昔乃繁榮と
察し知るゆゆ一軀乃本尊兩乃

二王中より容易なりゆゆゆ
あゆゆ由法も格式も各々例ゆゆ
公許ありて寺領も寄附ゆゆ
なゆゆ一村一邑乃同又町乃
間敷定りゆゆ同乃一栄一落五
年十年乃同ゆゆゆゆゆ
人とは是を是を是をしゆ積善
餘考積善餘殃あゆゆゆ
ゆしあゆゆゆゆ家あれとも介
滅し人あれとも家ハなしと子
乃教と皆ゆ地と人とゆゆ
ゆゆとたてくゆしゆゆ思ゆ
終をゆしゆゆ乃大書ゆゆ

千差萬別乃文字能と思ぬ
魚し人となくて七人世人と
面乃おとし一ふく同生父を見れ
よ世同様いハいうぬよときこ
ゆつなり人道乃正理を聖
諭なしたよりゆくり人こそ此
正理をゆりの人道をまじし
ゆりぬ極まりとろ此事をきひく
向ふよ学よ志れよと子孫を
たしうよ詳しよ此聖諭を
守り人ハ十人も一巻百人も

一巻も千万人も同一巻一心一極
なれともこれ依りぬを道に
ゆりたれハ人心をうしなひ
是も天生り学者不不学学
者貞言はゆりてハ文ニ
千差萬別り人こそ面乃おとし
とよゆり古人乃人を謝り
鑒ありなるとよ和日本よと
目利とよ和よら乃棟梁を此
人なとハ殊りたるとありま
事なり 主たる人なり此
目

たつとふおちふうちうめ、其
人其人たけろ事なや大と
中と小と細と多と少と乃間
貴りも賤りも人八人乃ち
油あなくさふなり
人乃親と老とハ其分く
應して心一途をそ然れも此
志と離却し約ぬ物なり天理
人理乃正を情之守り約、此
大と小ハそれ志親を違し約
その間時刻、正心誠意を備
身齊家を一生成事なり

鄭路、ゆ之迷ひ約ぬ物
細と微と乃事とよむ能是と
致来り乃通りつとめて二人
三人となり五人ハ七人となり
なく善事乃積みて子孫
乃光榮をなきしは事
ありちもそこちも是をえん
我、多分として是を
之此ハ長久を得ること
天理人理一定乃和なり
子孫を絶して家つさ家を
なくして子孫ありとす
有りとし久尺の父祖乃丹誠

つとく約々家財移とありて價の
貴も賤も世差家よしと小口
りり及下とまうせも下信せし
う神おもしろを自若としし
苦しと思ふところなまそれ料
を米くし新しし今八何
ま下も負めありて五節は
おけいらくれ川柳とろ醜態
をありハし終へハ其雨を離都
して今ハつめくろと子人此
つろと常と是をなけし
大あかろく
一代呵：大笑して此ろを言

マ難う事とろそとたこハ呵：
大笑り又ハ一笑ろすしきな
あふいとよろとろ笑う人を
見ぬうよしといハ大あやまり
として時と刻と足ハかぬ
このハ人なり内ハ妻子眷属
外ハちんちんつきとろの足物
器財雑具なり衣類ろとし
あしみな人ろなせしとろを
人うろとし人々買はる事
としてたろと人と人と眼と
相對してあちとろあちとろ
みなろとろと此間り喜怒

哀樂何事より離れ約は
をばつて毀譽も二とし
有るや言きや眼て知れ、耳て
し、心て知れ、微塵の心は
事といふは一こそ是を志る處て
善と悪と此差別を及ぶ我れ
我をしゆはよし我れは心と
よく我を志るといふ人乃我
知りやと此詳なるハなしと
人々をせしむる人々聞てせしむ
我れを志よく知れよと
いふ人乃一代おれら
いきて居約の間きりとハ

むつしき事よしして身分
つら不増すとハ酒を
り約めしと二人を
食し約も欲ぬとも損
失ハ自分一人にして別人
害なし人を救ひ人を
あはれむるあはれハ大吾心
にして其序なり利慾を
して竟ハ悪人としはれぬ
人乃世程なともする
決し約ハ損失をうら
い川までも致遠け約

あつろくたすうまのなうた
世流もつきてこれく是くを
とくし約なとくしひきき
あつろくたすうまのなうた
見孫も不肖ありてとく
なうたの報ありとく
なりて申く神佛の
たりて神佛の靈ありハ
呵ニ大笑しなうた
慚

いよりハのハ家珍なり
これきく約のなうた
言語

位といふ子供ありとく
きく身なり財に
はくゆことなし花乃肉の
たうハはくことありとく
名言とす魚し天ハ不福
人を生し約のなうた
家業なしといふあまし
あれハ人乃奴僕となうた
は人ありとくし
女身揚若ありとく
人を生しきし約
人といふ是なり

陰徳報報乃道理なりと
能く考へてよ乃人此
為善果を植へ約約は
ぬれよあハつとむむ
工夫して笑を大方大方
約ハ子孫まで可恥辱を
いけ約ハ事なりすし
なりとも清名を傳約約は
たつとけあ約約は又能人
乃あつとををを聖人
乃御御三人行乃向向吾
吾師ありといふあしきを

はしと善し海乃御教
なれハとら乃人一人ハ
つけ福ハたぬ事と是性
あをあ重人重人ハ
根交ありすなり

ふ乃中人乃あ乃一向
守念を想としてたて福と
たつと食乃を此事とし
一生を友と子も未れたし
言の貴と甲賤と富と
日用事字ハ朝朝暮暮

多々少々煩々雑々動々靜々
公々私々内々外々一向一
兀々と石々木々して一塊を
束縛約々^{あつて}此人と^なを
やうやう抑々^{おさ}り^おそれ中々
天生すま^うらひ^かを^まを^ま
あしきを^あ此^こを^を此人^にと
此^こに^をあ^つり^て同好^を人々
それ^を款^くく^り聚^あり^て約^り
是^を不可思議^とす^る色^し
^其た^く此^こ何^んと^いは^ぬと^自然^に
として親疎^を定^めり^父を^兄と

を^あつ^て別人^と親^し
厚^く結^ひ約^り善^く悪^く
あり^て秀^々臭^々自然^とワ^ら約^り
此^こ乃^を人心^乃一^種な^るを^信
と^信ま^りと^好師^益友^{なり}
^{あり}と^父母^乃教^へり^と
あ^しき^とワ^ら約^りと^決し^て
約^りて^自身^是を^し約^り
律^節と^して^人を^是を^て
あ^つて^正直^之の^丁寧^者或^ハ
氣^約乃^長短^或ハ^怒約^り
與^をあ^つて^奪と^し
^岩と^し

言をたすすして虚を
し約いつれも天眼正明を此
人乃一代ありちハい之言
榮枯地を換へ約乃理ハ
真言より好師益友を
脩身齊家乃事 正心誠意
乃事 孝弟忠信乃事
此の人乃道理乃正明乃事
を大事し信し信く是を
人乃大信心と云ふ也

王公大臣公卿大夫をとり子
たりてハ其家と云ふ家法

空りて臣族従類各々其職其
分空りて法度嚴密トし一
一其も其規模を亂し約事
あるは各々と云く是を守りて
守らざれば飛科となる可く
これつゝも各々それ科乃輕重
盡く是を亂して憲章を
みたし約々農工商乃所
志して家と云ふ其或法を
定り約々家物新古其
差ありあれと時とあり古
の善をたはむ者いして約ハ
其家乃大事トし七増

上人さうくゆらんなれどもあか
さうの自由なまうせて秘し
しゆゑの其危き事一衆目
是をえり賊ハ慎家を打せ
子やその奇特ありてさう
ほししゆゑの家ハ盗も
火災もまぬれゆゆ事
土人乃書りてみるゆゆ
人乃大書りてするし

讀書寫字をよびて其風味
得ゆハ人乃大書なり大概し
人乃師となす事ハ得る
趣し又好きて人乃師となすハ
聖人のいひ候ひしことなり人と大

の家業乃空りあることし予
餘力あれハ讀書寫字情交りて
常としゆゑハまきりゆといつれ
しても衣食住乃之ハ自身ハ自
身是を救ふ事とす
ゆゑハ生涯安樂を得る
農となりて耕耘乃事
又ハ工商乃同じしてなり
ゆゑハゆゑといふことなり
殖りもやもやまはし
人ハ工夫をすこと積りて
尺をついて丈とせし記録
書本印行もくえゆゆなれハ
其例を其格を擧げし面白

催し約りなれ八日たぐみこらりなれ
として延壽乃一助なほなり
一軒一木とよみ花なり宮なり
たぐりを人なりて厨下乃餘茶
是を天助なりとありて
たぐりめはくし約りありて
陶朱公乃橋と鯉を養ふ
法とも史をたらし約りなりハ
ありましけれとも志きうり
たぐりなりよるぬ雅なり
不自由不勝なりとて甲俗
乃殺風景なり混雜し約りぬ
柳なり何とをれハとて氣家
清高なりと約りひ約り事也

大坂より堺と三里なりあり
殿下茶店とよありそれすこし
南にち北西より茶店あり
は茶店乃老翁八十歳とて
歳とてふ約りなりて家北
軒下にして日こりなり
往来の人より約り息なり
を買て食し約りなりたつ
凡そ四五十年なりて軒下
は火をらと離れ約りなり
来り人なりをたぐりて志なり
けりなりとやき約りなりなり
かきなりといはる大なり乃棧なり

一の文之と人々是を去りて
粟と鐵とを引き去りて土を
すし子とあり踏上行とれ名
是を食して勞を口すれ物と
子とあり此老翁湯をたぐん
ろと物りし顔色朱を如た
赤とくして肥大なり力量も
なましくは八寸れ物と子何を
尋ねても答へ物りたてあつ
人を足るりてして赤くは
やまうりてとまり物りなり
唐工ハ是らも一傳として不朽
と包し

我々枸杞園のりりり茶を
りりて大船乃荷物を上けし
おろしてして一度まゝ六つり
りちんとりてその間一妻子ハ
いとまぐもて也すこしりり
ちんとりてりりもなく加し
かへまゝりりりりりりりり
らまをいとまぐもて也すこしりり
子老夫あり剃髪して園
なれともその名を改め物り
所乃りりハ皆孫を坊と子
空りて物り自ら以孫を坊と
子なり物りなり日本紀を
たごくと見、歴代乃軍書

ワキヲ時ふれんらん物事也
大概記をくし物なり寒
中ひとくまの一川或ハすて
の織りりー早朝日中これ方
三度水をくくり物もゆりく
常人も浴し居るあつくおし
坐してハ一桶より立てハ一桶
いつても井戸ありりし
此乃水をあひ物なりなる
快くも物なりーその寝床
空め物なり大くハ露宿しし
人乃家と忌と物なり町
めりりえそその紫格を
あらしめ志る

人を是れし物なり
正明なり先見乃明なり
可なり病もなく今ハ死し
物なりよまてしして
夜ハいんもよ物なり
ふれ是れ人乃是れをよ大言
聲にして怒氣人乃せま
かた事なり 我を
神ころよしとよまてしして
たれせハし物なりなく地上
むしろを一枚たすれなり
大いひきこ是す常人とハ思ひ
物なり死す年歳九十歳と

破家散財乃之く子よして父祖
乃陰禍年二月より悪報めり
来り此是此なき而なり是を信
わらふよのハ悪轉して善なる
たぐ何てろなくうハ善なる
我ハ此を改めずるの又此た
池まぬるをゆるん畏る魚し

何事も天命自然乃道
理よりいられぬ人情世態
大もハ自作自受ウ或ハ
又無繩自縛なりハ
彼を疑ハ是を疑ハ或ハ

是を信し彼を信し今ハ
死して明ハかじ是を脚痕
下七縦八横乃不平人とい
乃乃人是を諱る乃乃商を
人是を諱るキも金銭
少水乃魚乃乃生て
後らハ死乃一字つらと
定め物乃危乃い
片時乃用と云る乃
乃乃乃笑を得物乃
安に然と寝食し

花多ぬ月をたれしこ
たまえ鉄鉋の若芳
を大安樂とあそぶ
三皇五帝乃御手足
ひあう能れりたぐ
山をひきき川とれ水
すしを海くくと堅夫
ありて一國一州乃府
縣とて村と邑と人
すまを定りまよれ
所一田畑をひらたま

今乃よまつて人
衣食住乃安堵を得
乃理なるとま
考く思ふ處し八政八
食より始むとて聖
諭なりとあそぶ
あそぶ

我う身頭上り餘慶あれ外物
みたりありてまよし物に慾深
きよりいりて物と興をい
厭ふと成し人乃幸不幸と後



